



TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT 1477

クレンペラーが最初に演奏した交響曲作品は、モーツァルトの K.550 だった。1920 年 1 月のケルン歌劇場でのコンサートで、シェーンベルクの《ペレアスとメリザンド》の前に演奏された。Kölnische Zeitung 紙にはスコアの暗部を強調するため弦楽器を減らした編成を用いたと記録されている。そして演奏は、「真の古典主義スタイルの透明性とリズム的にもダイナミクスの的にも巧妙な 'con espressione' (表情豊かに) だった。」と評された。もっと肯定的な評もあったが、1923 年レニングラードのコンサートを聴いたロシア人指揮者、ガブリエル・ユードィンは、モーツァルトの 40 番（ブラームスの 1 番と演奏された）がクレンペラーの爆発するような激しさを抑圧してしまうという印象を持っている。ローマでは、1935 年にサンタ=チェチーリア管弦楽団と演奏しているが、クレンペラーは妻ヨハンナに宛てた手紙の中で、「アンダンテの部分を充分詩的に演奏できないでいる。いつも音が欠けている感じがするのだ。」と不安を漏らしている。実際には、コンサートは大成功でレビューは大絶賛だった。

それでもなお、50 年代の半ばにモーツァルトの交響曲をロンドンで披露する（フィルハーモニア管との録音とコンサート）までは、評論家たちは納得しておらず、後に《フィガロの結婚》や《コジ・ファン・トゥッテ》の解釈を巡って敵対することになる。最後の 3 交響曲を演奏したプログラムをマーティン・クーパーは「絶対に堅く・・・色彩感に乏しく・・・微笑みがなく・・・学校の授業のような」といった言葉を使って酷評している。しかし Times 紙の判断は違う。「最も印象に残ったことは、どんな交響曲を振る時も常にクレンペラー氏は絶対に正しいということだ。つまり、テンポもバランスもフレージングもダイナミック・レベルもすべて正しいというべきものだ。」EMI への 1956 年の同曲のレコーディングはグラモフォン誌のコンダクター賞を獲得した。評論家トレヴァ

ー・ハーヴェイは、「私にとって確かに、最も満足いく録音だった。選考基準を下げることはしない。フィルハーモニア管はクレンペラーに最上の演奏をもって応えている。特に静かな弦楽の音色・・・。」

晩年、クレンペラーはモーツァルトの40番とブルックナーの7番の組み合わせを好んだ。（この1965年のロンドン・コンサートのすぐ後にも同じプログラムを母親の故郷でもあるハンブルクで公演している。）ブルックナーの7番を最初に指揮したのは1921年。以降、ブルックナー交響曲の中ではあまり知られていなかったこの作品の最強の擁護者となった。特に、ヨーロッパやアメリカでのデビューの際はこの作品を取り上げることを好んだ。ニューヨーク・フィルハーモニックとの1927年のコンサート評の中にはこの作品を拒絶する評論家もいたが、クレンペラー自身は称賛され、簡潔に「ニューヨークではブルックナー指揮者は今まで誰ひとり喝采を受けていない」と付け加えられていた。聴衆には受け入れられ評論家には敵対されるという同じような事態が1931年にローマでもロンドンでも起こり、そのせいでクレンペラーはこれらの土地を嫌うようになった。

「ブルックナーの7番をやっている。大層難しく、チューバのせいでリハーサル時間が無駄になる。」クレンペラーは実質的に彼のコンサート・エージェントだったピアニストのアルトゥール・シュナーベルにうめいた。妻への手紙に「このオーケストラはブルックナーに向いていない。」とも書いた。評論家達の視野もまだ狭かった。「ロンドンはこちら大陸的レパートリーの演奏を耐え忍んでいる。」Musical Times 紙はこんなことを言っている。「お気付きだと思うが、ブルックナーだ。ブルックナーの演奏は悪評につながることを知りつつも尚、邁進し続けてきた指揮者によってなんとか生き延びているような作品だ。誰も顧みない60分の作品とねんごろなことを見せつけて、さらに新しい作品を探し出そうとまでしている。」Observer 紙でもスコアに関して「単調で平凡」と酷評しており、最後には「燃やしてしまえ！」とまで言い放っている。著名な評論家ネヴィル・カーダスですらブルックナーを「エルガーの音楽技法の10分の1の価値しかない」と考えていた。「みんなこの音楽が嫌いなようだ。」後にクレンペラーはアメリカから妻へ宛てた手紙でこう洩らしている。「なんでこんなことをしているのだ？本当の自分より良く見てもらいたいなんて思っていない。開拓精神という訳ではないのだが、他の作品もすべてを演奏してみたいのだ。そしてこの曲で、皆の興味を引き出したい。」この精神は、ニューヨークでトスカニーニのリハーサルに同席した際、さらに高まった。「マエストロは私に興味を示してくれた。そして、彼自身先週7番を振ったばかりのブルックナーについて温かく語ってくれた・・・。」

戦後ヨーロッパに帰還してすぐ、クレンペラーはウィーン・フィルハーモニーへの客演を定期的に行うようになり、これにより音楽界での注目度も格段にあがった。必然的に、このシリーズの最

初のプログラムにはブルックナーの7番が含まれていた。この一連のコンサートは、それぞれの演奏というより総合的な成功として絶賛された。1948年9月ブダペストでのラジオ放送でもこの交響曲を演奏したが（ブダペストでも国立オペラの客演指揮者としての名声を早々に確立していた）、緩徐楽章のクライマックスで打楽器奏者がシンバルの一撃を忘れたため、クレンペラーは激怒して叫んだという。1949年、メルボルンでもこの交響曲の演奏を成功させた。1955年5月、生誕70年記念コンサートも、1924年に音楽監督を務めていたケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団での初めてのブルックナーの7番だった。

1958年2月、クレンペラーはウィーンでこの交響曲を再演した。コンサートはもうひとつのお気に入りの作品であるモーツァルトのイ長調K.201で始まった。腰の手術の影響で10年以上座って指揮をしてきたクレンペラーだったが、回復したため立って指揮をした。評論家はまずこれにはらはらしたが、肉体的逆境を乗り越えたクレンペラーが描き出した大勝利と喜びに満ちたブルックナーの第7番を絶賛することになった。評論家のひとり、クレンペラーがトーマス・マンの小説《ファウスト博士》の主人公レーヴェルキューン（訳注：レーヴェルキューンはドイツの作曲家という設定で、シェンベルクがモデルになっているという説もある。）が自身の作品《アポカリプス》の初演を依頼した指揮者を彷彿とさせたと語っている。他の評論家も、クレンペラーの「偉業中の偉業」「音楽を精神力に昇華する演奏解釈」「音楽の至高への気付きと、精神鍛錬としての役割」といった言葉でその成功を声高に述べている。「この交響曲を全編歌うように、流れるような抒情に満ちながらも力強く構築されたクライマックスの集合体として演奏した。」

この頃までには、クレンペラーはロンドンでこの交響曲を再演し、演奏も作品も大変な名声を得た。観客は1930年代初頭とは全く違ったかたちでこのコンサートを楽しんだ。ブルックナーとマーラーはコンサートで頻りに演奏されるようになり、以前のような希少作品の紹介といった意味合いはなくなりつつあった。EMIへの同曲の録音はフィルハーモニア管との共演で、デリック・クック（イギリスの著名な音楽学者）を除くほぼすべての評論家を狂喜させた。フェスティヴァル・ホールでのブルックナーの第4-9番のコンサートは、自身のベートーヴェン・チクルスに次ぐ偉業であった。

Mike Ashman, 2012

訳：小林茂樹